

# 日本における『家礼』式儒墓について

— 東アジア文化交渉の視点から (一) —

吾妻重二

はじめに

南宋の朱熹(一一三〇―一二〇〇)が著わした『家礼』(『文公家礼』、『朱子家礼』とも)は、家族レベルにおける「冠婚喪祭」の儀式マニュアルであり、朱子学の広範な伝播とあいまって中国のみならず東アジア地域に大きな反響をもたらした。

この冠婚喪祭の四礼のうち、後世とりわけ重視されたのが「喪礼」と「祭礼」の二礼であった。これは親に対する孝の自覚および実践と関係があり、近世日本においても『家礼』のこれらの儀礼は儒者や儒教共鳴者を中心に強い関心を集めていた。このうち「喪礼」は葬儀と服喪の二つを含んでおり、その記述をふまえて葬儀がとり行なわれ、親や家族の儒式墓が造られるのであって、それは日本における儒教の思想的営為の重要な実例として見逃すことができない。

しかし、『家礼』にもとづく儒教式墓に関しては、その形状といふ大きさといふ、これまでほとんど注意されてこなかった。そのため、どのような墓が『家礼』式の儒墓なのか判然とせず、したがって同種の墓がどれほど作られたのかもわからないという状況が続いている。これまでの研究で『家礼』式儒墓の形状にいくらか触れたものとしては近藤啓吾、松原典明、北脇義久諸氏の論文があるが、必ずしも系統的ではなく、また『家礼』の記述に関する解釈も検討の余地をなお多く残していると思われる。

このような状況にかんがみ、ここでは『家礼』式儒墓がどのような形状と性格をもつのかを中国や朝鮮の状況をふまえながら具体的に考察するとともに、日本の重要な事例を紹介、検討し、その独自性についても指摘したい。もちろん日本の儒式墓がすべて『家礼』式というわけではないが、多くは『家礼』の影響下にあると考えられるから、本稿での考察は近世日本における『家礼』の

影響の度合いの一端を示すことになるであろうし、また今後、当の墓が儒式か否かを判断するのにもかなりの程度役に立つことであらう。

『家礼』式墓か否かの判断に関しては、誌石の有無もその一つの基準になる。『家礼』では墓誌の制作が明記されているからである。ただし誌石は墓側に埋められるため、地下を掘らない限りその存在は知られず、したがってそれがあるかどうかは普通はわからない。よって誌石については、ここでは付带的に取り上げるとどめることにする。

もう一つ、墓前に立てる墓石を墓標や墓塔、石塔などと呼ぶ場合があるが、『家礼』や中国の礼制によれば「墓碑」と呼ぶのが正しく、ここでもこの呼称を用いる。塔とはいってもなくストウパー（塔婆）のことであって、墓塔や石塔といった仏教的名称によつて日本のすべての関連墓石を呼ぶのは問題である。<sup>②</sup> そのような呼称は「日本近世の墓はすべて仏式」という思い込みによるものだからである。

なお紙幅の関係上、今回は日本の事例に関しては林氏墓地までにとどめ、それ以降の例については次号で考察することとしたい。

## 一 『家礼』における墓碑

### 1 『家礼』における墓碑と誌石

まず、『家礼』における墓碑の記述を見てみたい。その巻四・喪

礼・成墳に次のようにある。

墳高四尺。立小石碑於其前、亦高四尺。跌高尺許。

今按、孔子防墓之封、其崇四尺、故取以為法。用司馬公說、別立小碑、但石須闊尺以上、其厚居三之二、圭首而刻其面如誌之蓋、乃略述其世系名字行實而刻於其左、轉及後右而周焉。婦人則侯夫葬乃立、面如夫之誌蓋之刻云。

（墳は高さ四尺。小石碑を其の前に立て、亦た高さ四尺。跌は高さ尺許り。

今按ずるに、孔子防墓の封、其の崇さ四尺なり。故に取りて以て法と為す。司馬公の説を用いて別に小碑を立つ。但だ石は須らく闊さ尺以上なるべく、其の厚さ三の二に居る。圭首にして其の面に刻すること誌の蓋の如くす。乃ち略ぼ其の世系・名字・行実を述べて其の左に刻し、転じて後・右に及びて周らす。婦人は則ち夫の葬るを俟ちて乃ち立つ。面は夫の誌蓋の刻の如くすと云う。）

『家礼』に記された墓碑の説明はこれだけである。この記述は司馬光『書儀』の所説をふまえてつづつ改変を加えているので、それを引用すれば次のようである。

墓前更立小碑、可高二三尺許、大書曰某姓名某、更不書官。

（『書儀』卷七・喪儀三・碑誌）

（墓前に更に小碑を立つ。高さ二、三尺許りなるべし。大書して某姓名某と曰い、更に官を書せず。）

はじめの『家礼』の記述にいう「孔子防墓の封」云々とは『礼記』檀弓篇上に見える話にもとづくもので、孔子は曲阜近くの防の地にあった父の墓に母を合葬した際、その封（盛り土）の高さを四尺にしたという。<sup>③</sup>右の引用にあるように、司馬光は墓碑の高さを二、三尺程度としたが、朱熹はこの孔子の伝説にもとづいて盛り土の高さを四尺とし、墓碑の高さもこれに合わせて四尺にしたというわけである。

さて、このように墓碑を立てるという行為は、実は当時、誰にでも許されているわけではなかったので注意しておきたい。宋代の喪葬令（天聖令）に次のようにあるからである。

諸碑碣〔其文皆須実録、不得濫有褒飾〕、五品以上立碑、螭首龜趺、踏上高不得過九尺。七品以上立碣、踏上高四尺、圭首方趺。若隱淪道素、孝義著聞者、雖無官品、亦得立碣。<sup>④</sup>

（諸碑碣は〔其の文は皆な須らく実録にして、濫りに褒飾有るを得ざるべし〕、五品以上は碑を立つ。螭首龜趺にして、踏上の高さ九尺を過ぐるを得ず。七品以上は碣を立つ。踏上の高さ四尺にして、圭首方趺。隱淪・道素、孝義もて著聞する者の若きは、官品無しと雖も、亦た碣を立つを得。）

すなわち、墓前の墓石には碑と碣があり、官品が五品以上の高級官僚のみ「碑」を立てることができる。その場合の形状は「螭首龜趺」で、趺（台石）の上の高さ、すなわち碑身の高さは九尺を越えてはならない。また七品以上の中級官僚の場合は「碣」を

立てるが、その場合「圭首方趺」の形状とし、踏上の碣本体の高さは四尺だという。また隱士や徳行の人物、孝義をもつて名が知られた者は官品がなくても碣を立てることができるという。この喪葬令は司馬光『書儀』も引用しており、これとほぼ同文である。<sup>⑤</sup>整理すれば次のようになる。

#### 宋代の礼制（喪葬令）による墓碑のづくり

五品以上	碑	螭首龜趺	碑身の高さは九尺まで
七品以上	碣	圭首方趺	碣身の高さは四尺

八品以下、庶人	なし	隱士や徳行の人物、孝義をもつて知られた者は官品がなくても建立できる
---------	----	-----------------------------------

このように、宋代の礼制では、五品以上の者が墓碑を、七品以上の者が墓碣を立てることができ、下級官僚や官位のない一般の庶人にそれらを立てるのは、特別な場合を除いて許されていないかった。『書儀』によれば、こうした礼制を無視して「高墓大碑」を作る風潮もあったらしいが、ともあれ司馬光が高さ二、三尺ほどの「小碑」を作り、表面に「某姓名某」とだけ大書するとしたのは、礼制を大きく踏み外さず、しかも一般の士庶に墓碑を立てるのを許すにはどうしたらいいかを考慮した結果であろう。『家礼』は「司馬公の説を用いて別に小碑を立つ」というようにこの構想

を継承しつつ、しかも『礼記』檀弓篇上の記述に従って高さを「四尺」としたわけである。『書儀』と『家礼』が、碑と碣を区別せずにまとめて「碑」と呼んでいるのも、身分や地位にとらわれない共通の礼式を考えた結果と見ることができる。

朱熹はもちろん、当時の礼制による制限をよく知っていた。そのことは父朱松の改葬にあたって、朱松は正四品にあたる通議大夫を贈られているから「螭首龜趺」で高さ九尺の墓碑を造ることができる、と主張していることからわかる。<sup>6</sup>しかし朱熹は『家礼』において、そのような国家の公的制度とは少し違う礼式を構想したわけである。

次に、墓碑正面に刻む文字であるが、『書儀』は「大書して某姓名某と曰い、更に官を書せず」として官位については記さないとするが、『家礼』では「其の面に刻すること誌の蓋の如くす」というように、誌石の蓋に刻んだ文字と同様にするという（誌石については後述）。これによれば、官位があれば「有宋某官某公之墓」と刻み、官位がなければ字を用いて「某君某甫」というふうに刻むことになる。「某官」とは寄祿官の名称をいい、前の朱松の例でいえば「通議大夫」がそれにあたる。そうであればこの場合、『家礼』は官位の有無すなわち士人と庶人による礼的表現の違い、いわゆる礼の等差につき『書儀』よりも配慮を加えていることになる。

また、『書儀』は墓碑の形については何も述べていない。『家礼』という墓碑の形は「圭首」であるから、これは喪葬令で七品以上

は「圭首方趺」にするというのにならったものと思われる。また、喪葬令では七品以上の碣本体の高さは四尺とされるから、『家礼』にいう碑身の高さに等しい。そうであれば、『家礼』にいう墓碑は結局、宋代における七品以上の官人とはほぼ同様のつくりということになる。庶人もそうした墓碑を造れるとするのは、ある意味で「分」を超えた構想である。

碑の下の趺（台石）についても『書儀』は記していないが、『家礼』は「趺は高さ尺許り」としてこれを認めている。その形状はやはり喪葬令にならって方趺（方形の台石）が考えられていたと思われる。

さて、墓誌について見てみると、『家礼』巻四・喪礼・治葬に「刻誌石」（誌石を刻む）の条があり、それによれば蓋と底の二片の石を用い、蓋には官位があれば「有宋某官某公之墓」と、官位がなければ字を用いて「某君某甫」と刻み、底の方には簡単な履歴を刻む。女性の場合もまた、夫の官品の有無や、夫の生前と死後とで語句表現はやや違うが、やはり誌石を作り文字を刻む。そして埋葬の日にこれら二片の石を向かい合わせにし、鉄線でぐりと束ねて壙の前の地中に埋めるといふ。<sup>7</sup>『書儀』は蓋と底の区別につき述べていないものの、誌石本体に刻む文章については、これとほぼ同様の説明になっている。

また『家礼』巻四・喪礼の「下誌石」条によれば、地中に煉瓦を一重に敷いてその上に誌石を置き、さらに四周を煉瓦でぐるり

と囲んで土で覆うとする。<sup>(8)</sup>

ここで注意したいのは、当時の礼制では下級官僚と庶人は、これまた墓誌（誌石）を作ることができないとされていたことである。そのことについては『朱文公文集』巻六十三、「答李継善」第四書簡に次の問答がある。

政和儀、六品以下至庶人無朔奠、九品以下至庶人無誌石、而温公書儀皆有之。今當以何者爲據。

既有朝奠、則朔奠且遵當代之制、不設亦無害。但誌石或欲以爲久遠之驗、則畧其文而淺瘞之、亦未遽有僭偪之嫌也。

（政和儀に、六品以下、庶人に至るまで朔奠無く、九品以下、庶人に至るまで誌石無し。而して温公書儀は皆な之れ有り。今當に何者を以て拠と爲すべきか。

既に朝奠有れば、則ち朔奠は且く当代の制に遵う。設けざるも亦た害無し。但だ誌石は或いは以て久遠の驗と為さんと欲すれば、則ち其の文を略して浅く之を瘞むるも、亦た未だ遽かには僭偪の嫌い有らざるなり。）

ここではじめにいう朝奠・朔奠については措くとして、いま主要なのは北宋末に施行された国家礼制『政和五礼新儀』によれば九品以下、庶人は誌石を作ることができなかったという指摘である。いま『政和五礼新儀』（四庫全書本）巻二百十六・凶礼・品官喪儀中・葬の条を見ると、確かに埋葬時の行列のところに「誌石車<sup>九品無</sup>」とある。誌石を載せる車がないということは、ここで指

摘されるように、誌石そのものがないことを意味していた。

ではどうしたらよいかと問う門人に対して、朱熹は「誌石は遠い将来にわたって、そこに墓があることを示す驗となるものだから、墓誌の文章を簡略にし、また浅く埋めれば必ずしも僭越ということにはならない」として誌石の制作を許容している。また、誌石を埋める場所は、壙の中でなく壙のうえに、三尺あたりがよいという。<sup>(9)</sup>

これは興味深い発言で、これもまた当時の国家礼制を考慮しつつ、できるだけ広範な階層に儀礼実践を可能にしようとする方針によるものといえる。『書儀』および『家礼』では、墓碑と同じく誌石もまた、官品をもたない庶人も作ることができるとしているのである。

そもそも『家礼』の特色の一つは、身分や地位を越えて、誰でも実行可能な儀礼を構想したことに<sup>(10)</sup>あるが、そのことは墓碑や誌石の制作に関しても当てはまるのであって、ここにも『家礼』の近世的新しいさを見ることができるのである。

## 2 墓碑の大きさについて

次に、墓碑の大きさについて見てみよう。『家礼』という尺はいわゆる周尺、しかも宋代にいうところの周尺であって、今の二一・二センチに相当する。

これについては、『書儀』巻二・深衣制度に「凡尺寸皆当周尺

度之」(凡そ尺寸は皆な当に周尺を用いて之を度るべし)といい、『家礼』巻頭・家礼図の「尺式」に「神主用周尺」(神主は周尺を用う)とあって、『書儀』と『家礼』ではいずれも周尺を尺度の基準にしていたことがわかる。<sup>(11)</sup>

ただし周尺といっても、実は古代周王朝において一定の基準はなく、八百年に及ぶその歴史の中でかなり変化しつららしい。漢和辞典の付録の「度量衡表」などには周尺の寸法が十八・〇センチとか二十二・五センチなどと明記され、また阿部猛『度量衡の事典』(同成社、二〇〇六年)でも「周代の尺は約23cm」(同書七三頁)と明記しているが、もとづく根拠がまちまちなようで、実際にはどれも正確ではない。というより、周代を通して固定した標準尺度というものがそもそも存在しなかったのである。<sup>(12)</sup>

しかし、宋代にいう「周尺」がどの程度の長さでされたのかはわかるのであって、北宋の高若訥が『隋書』律曆志によって復元した十五等古尺のうちの「晋前尺」を指していることは間違いない(『宋史』律曆志四)、その長さが二十三・一センチなのである。『家礼』を含め、宋代にいうところの「周尺」が二十三・一センチと推定されることは諸研究者の一致するところである。<sup>(13)</sup>

これにより、『家礼』が構想していた墓碑の大きさは次のようになる。すなわち、墓碑本体の高さ(四尺)は九十二・四センチ、闕(二尺以上)は二十三・一センチ以上、厚さ(三分の二尺以上)は十五・四センチ以上である。また趺の高さ(尺許)は二十三・一セ

ンチ程度である。

### 3 圭首の形状——その原義と根拠

次に、墓碑の形状について検討したい。上述したように『家礼』では「圭首」といつているが、この圭首は実際どのような形なのであるうか。朱熹はこの点について特に具体的説明を残していないようなので、少し考証を加えてみたい。

「圭角」という語があるように、圭首というと一般に先端の尖った形をイメージしがちだが、実は、圭首にはそのような左右対称で上部を尖らせた形状のほかに、上部がゆるやかに円まった形状の二つがあるのであって、かりに前者を尖頭型と呼び、後者を円頭型と呼ぶことにする。実際に日本の『家礼』式墓碑には、後述するようにこの二つの形が見うけられる。

そもそも圭は中国古代の玉器であるが、考古学者の常素霞によれば、

圭の形は少なくとも2種類ある……一つは上が丸く下が四角いもので、これを円首圭と呼ぶ。もう一つは上が尖り、下が四角いもので、これを尖首圭と呼ぶ。<sup>(14)</sup>

といい、

周の玉圭は主に平頭圭と尖頭圭の2種類に分かれる。……尖頭圭はその後次第に規範化し、歴代玉圭の唯一の形式となった。<sup>(15)</sup>



と指摘している。林巳奈夫もまた、尖頭型の圭につき「このような形状をもつた圭は戦国時代中期頃に少数現れ出す<sup>17)</sup>」といっている。つまり、圭はもともと円頭型（もしくは平頭型）と尖頭型の二種類があり、発生は円頭型の方が早い、戦国時代以降、尖頭型が一般の玉圭の形になったことになる。

次に、文献資料についてこのことを確認してみよう。まわりくどいようだが、後世の人々が『家礼』にいう「圭首」の形状を復元する際、中国古代の文献資料によるが多かったと考えられるからであり、彼らが何を参照したのか、その根拠を調べておくのも無駄ではないと思われるからである。

#### ○尖頭型（左右対称で上部を尖らせた形状）

この形状については、『儀礼』聘礼・記に、

圭與纁皆九寸、剡上寸半、厚半寸、博三寸。

（圭と纁とは皆な九寸、上寸半を剡<sup>けず</sup>る。厚さ半寸、博さ三寸。）とあるのが重要である。これは圭および、圭の敷きものである纁の形について述べたもので、これを復元したのが〈図1〉<sup>18)</sup>である。また〈図2〉<sup>19)</sup>は漢代の玉圭で、尖頭の左右対称形をきれいに示している。

上述したように、この尖頭型は後発の形だが戦国時代以降次第に一般化し、我々が一般にイメージする圭の形となった。日本の若林強斎『家礼訓蒙疏』巻三に「圭首ハ象戯ノ駒ノ首ノヤウナル

ヲ云<sup>20)</sup>」といい、藤井懶斎の『二礼童覧』巻上に「しやうぎがしら」と、『家礼』の墓をいずれも将棋の駒の形に喩えているのはこの尖頭型の説によったものである。

#### ○円頭型（左右対称で上部がゆるやかに円まった形状）

この形状に関しては、上記『儀礼』聘礼・記の鄭玄注に、

圭、所執以爲瑞節也。剡上、象天圓地方也。

（圭は、執りて以て瑞節と為す所なり。上を剡<sup>けず</sup>り、天円地方に象<sup>かたど</sup>るなり。）

とある。ここに上部を削って「天円」にかたどるということから、鄭玄は『儀礼』聘礼にいう圭を円頭型と理解していたことになる。このほか、『説文解字』土部に、

圭、瑞玉也。上圓下方。

（圭は、瑞玉なり。上は円にして下は方。）

といい、段玉裁注に「圭之制、上不正圓、以對下方言之、故曰上圓」（圭の制、上は正円ならず、下の方に対するを以て之を言う、故に上円と曰う）とあること、同書・門部に、

閨、特立之戸、上圓下方、有似圭。

（閨は特立の戸なり。上圓下方にして圭に似たる有り。）

とあるのはみなそれである。あとの「閨」については、戸が一枚だけで上がアーチ形の扉ということである。また、段玉裁注が上部は「正円ならず」といっているのは、上の丸みがやや扁平になっていることをいうかと思われる。林巳奈夫は「これは天圓地方

の考へに合わせて説明したものであるが、……上端の圓い圭をいつたことは確かである。さうすると圭とは、先が尖る尖らないにかかはらず、長軸を中心に左右對稱な形の板狀の玉といふことになる」といつており、正しい解釈と思われる。<sup>(22)</sup>〈図3〉<sup>(23)</sup>は殷後期の玉圭、〈図4〉<sup>(24)</sup>は戦国時代の圭でいずれも上部が尖らず、円まった形状になっている。

このように見ると、「圭首」も二通りの解釈が可能ということになる。『家礼』の原義はこのうちの円頭型だったらしいが、ただし、後世の人々が『家礼』にもとづいて墓を造る場合、「圭」をどう解釈するかによつて違った形状をとることになった。その実例はあとで見るとして、まずはこの二つの形状を念頭に置いておきたい。

#### 4 まとめ——『家礼』式墓碑のつくり

以上、墓制に関し『家礼』の記述をめぐつて考察してきた。『家礼』は身分や官位、あるいは国家礼制の規定にとらわれず、いわば誰にでも造れる墓のつくりを提示していた。まとめれば『家礼』式墓のつくりは次のようになる。

一、墓碑の碑身の大きさは次のとおりである。

高さ 九十二・四センチ（四尺）

幅 二十三・一センチ以上（一尺以上）

厚さ 十五・四センチ以上（三分の二尺以上）

ただし、『家礼』にいう大きさは一種の目安であつて、「……以上」「……許」といった言い方が示すように、必ずしも厳密な数字ではなく、実際にはこれと多少のズレが生じることはいうまでもない。

また、もし日本の伝統的な曲尺で計算すれば、一尺は約三十・三センチだから周尺二十三・一センチよりかなり大きくなる。実際、日本の『家礼』式墓碑にはそのような大きさをものがある。

二、墓碑の形状は圭首である。圭首は左右對稱で上部を尖らせたい形状（尖頭型）と、上部がゆるやかに円い形状（円頭型）もしくは平頭型の二種類があるが、『家礼』本来の形は後者の円頭型だったと思われる（後述参照）。いま円頭型をタイプAとし、尖頭型をタイプBとしておく。

三、<sup>(25)</sup> 踏（台石）の高さは二十三・一センチ程度（尺許）。形状は方<sup>(26)</sup> 踏（方形の台石）である。

四、墓碑正面には、墓主（故人）に官位があれば「有宋某官某公之墓」と刻み、官位がなければ字を用いて「某君某甫之墓」などと刻む。「官」とは寄禄官のことで、日本でいう官職に当たる。「甫」は字の末字に多用される文字で、北宋の王安石の字は介甫、南宋の陳亮の字は同甫といったごとくである。

これらはいわゆる俗名であつて、もちろん「〓院」など



の戒名などは刻まない。また日本の場合でいうと朝代が存在しないから、それを示す「有宋」などの文字も省かれることになる。もちろん、字がなければ刻まなくてもよいことになるう。

五、墓主の「世系・名字・行実」などを記した履歴を、墓碑の向かって左面から背面、そして右面へとぐるりと刻む。これを墓誌と呼ぶことがあり、日本では「誌銘」「墓誌銘」の名で墓碑に刻まれる場合もあるが（林鶯峰や鶴飼石斎の墓碑など）、正しくは誌石に刻まれたものが墓誌であるから、ここでは履歴もしくは墓碑文と呼んでおく。

六、女性の墓碑もほぼ同様の作りが想定されている。墓碑正面に刻む名こそ、夫の官位の有無等によって違ってくるが、『家礼』は男性と女性の墓碑のつくりにはほとんど区別を設けていない。あとにいう誌石についても同じで、女性もこれで作れるとする。

このほかに『家礼』の述べる墓には次の特徴もある。

七、土葬する。墳土（盛り土、いわゆる土饅頭）の高さは碑身と同じく九十二・四センチ（四尺）程度になる。形状については何も述べていないところから、『礼記』にいう馬鬣封など特別な形ではなく、伝統的な円墳が想定されていたらしい。

八、誌石を墓の前に埋める。地中に煉瓦を一重に敷いてその上

に誌石を置き、さらに四周を煉瓦でぐるりと囲んで土で覆う。深さは墳はかのうえ二、三尺あたりがよいという。<sup>(25)</sup>

土葬に関しては、『家礼』巻四・喪礼・靈座 魂帛 銘旌」条に「不作仏事」（仏事を作さず）とあるように、『家礼』は仏教による火葬を親の肌体を毀損する行為として厳しく禁じていた。<sup>(26)</sup> として一般に墳土があれば土葬と判断してよいと思われるが、日本では墓域が狭隘なために縮小、改葬されたり、風化によって消滅したり、あるいは坐棺などにより墓碑のすぐ下に埋葬したりすることなどから、墳土をはっきり残す例はきわめて少ない。したがって、その墓が土葬であるかどうかは外観からは判別しがたいことが多い。

ついでに墓の場所についていえば、『家礼』では「山水の形勢」を選び、「土色の光潤、草木の茂盛」なる場所に営むとする（巻四・喪礼・治葬）。中国や朝鮮ではおおむね、そのような山林の形勝の地に造られる（これには民間の習俗である「風水」も関係するが、ここでは論じない）。一方、日本では寺檀制度の制約などにより、住まいからほど近い寺院内に造られる場合が大半であるが、野中兼山が造った母・秋田萬の墓のように、人里離れた山中に営まれることもある。

墓誌に関していえば、上述したように、それを刻んだ誌石は墓前の地中に埋められるから、普通、墓を掘らない限り見ることはできないわけだが、もし何らかの理由で外に出た場合は重要な指

標となるであろう。林氏墓地にいくつか残る誌石などはそうした例である。そもそも、誌石の重要な目的は、何かの理由で墓が崩れたりした場合、そこに墓があることを知らせ、土を埋め戻してもらうことである。しかし日本の場合には儒式墓であつても寺院内に造られることが多く、墓は寺が管理してくれるから、そのような心配はさほどない。そうであれば、墓誌を作つて誌石を埋める必要性は実はあまりないともいえる。墓碑に刻んだ履歴を墓誌代わりにする例が多く見られるのはそのためかもしれない。

なお、ここでは墓誌と総称しているが、「墓誌銘」という場合、散文の「誌」と韻文の「銘」の両方が備わっているのをそのように呼ぶことはいうまでもない。より正確には、散文だけでは「墓誌」といい、韻文だけでは「墓銘」と呼ぶ。

このほか、『家礼』式の墓かどうかについては文献資料による裏づけもできるだけ行なう必要がある。墓主や関係者が『家礼』によつて造墓したと記している場合はもちろん、同書を引用、参照していたり、関連著述を残していたりした場合、その墓は『家礼』にもとづいて造られた可能性が高くなる。

もちろん、右に挙げた諸事項は『家礼』式墓のもつ特色を、いわば額面どおりに列挙した一種のモデルであつて、実際にはこれとは何がしかの差異が生じることは当然ありうるし、これらのうちの数項を満たすにとどまる場合もあろう。しかし、一定の基準にはなるはずであり、我々は当の墓が『家礼』式墓であるかどうか

判断する場合、右の特色を念頭に置いて考えるところと思われる。ついでに墓碑と墓表および神道碑の違いについても触れておきたい。これらはいずれも墓側に立てられて墓主の標識となるものだが、墓碑が官品によつて形状や大きさの制限を受けるのに対して、「墓表」は官位の有無にかかわらず立てることができる<sup>(27)</sup>。宋代の例を一つだけ挙げれば、司馬光による「司馬謖墓表」がそうで、司馬謖の官位は尚書比部郎中だから従六品にすぎないが、螭首亀趺で篆額をもち、碑は首部分が七十四センチ、身部分が百六十七センチという堂々たる大碑である<sup>(28)</sup>。司馬謖は司馬光の再従兄（またいとこ）にあたり、高位高官にのほつた司馬光がみずからの一族を表彰せんがためにかくも雄壮な墓表を造つたものと思われる。

また碑が墓前ではなく、墓に通じる道すなわち神道（墓道）の側に立てられることもあつて、その場合は「神道碑」という。これは礼制における「碑」に相当するもので、上述のとおり宋代では五品以上の高級官僚だけが立てることができ、しかも神道をもつわけだから、当然規模の大きな墓ということになる<sup>(29)</sup>。たとえば、朱熹による「劉子羽神道碑」や「黃中美神道碑」がそうである。いずれも立派な石碑であつて、劉子羽の神道碑は高さ三・七メートル、幅一・五メートル、黃中美の神道碑は高さ二メートル、幅一・三メートルという大きさと、それぞれ福建省武夷山および邵武県に現存する<sup>(30)</sup>。劉子羽は少傅で正一品、黃中美光祿大夫は正三品に

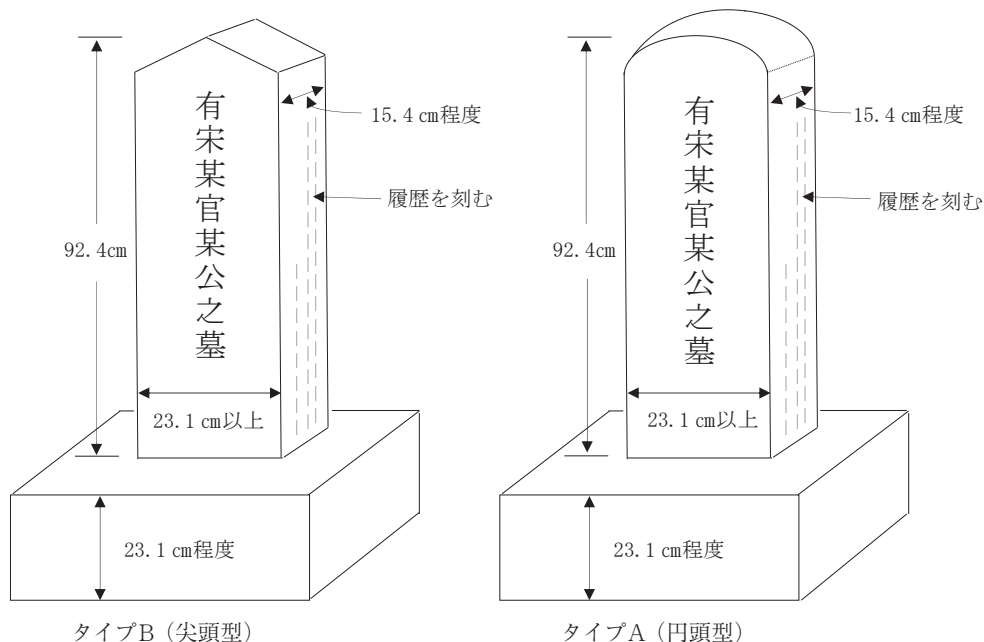


図5 『家礼』式墓碑復原図

あたるから、かく立派なのは当然である。

このように『家礼』にいう墓碑と、いわゆる墓表および神道碑とは違うところがあるので注意が必要である。

説明が長くなったが、『家礼』式墓がどのようなつくりで、どのような意味をもつのかはほぼ以上である。ここで『家礼』式墓碑を、下部の趺(台石)を含めて復元すれば(図5)のようになる。

## 二 圭首の墓碑——中国・朝鮮

### 1 中国(宋元)

ここで中国と朝鮮における「圭首」の墓碑の実例を見てみたい。日本の場合とどこが共通し、また違うのか、その異同を知るのにも重要だからである。結論から言えば、近世における中国および朝鮮における墓碑の「圭首」、しがたってまた『家礼』にいう「圭首」は尖頭型ではなく円頭型だったようである。

ただし、いま中国宋元代当時の墓碑はあまり伝わっていない。近年、墓が発掘されて墓室内のつくりや副葬品が報告される例はあるものの、地上部分については変遷が激しく、戦乱や文革の破壊によって墓碑類が消失したり、逆に顕彰のために増修が加えられたとして、墓碑が建立当時のまま残っている例は稀である。近世の墓碑は著名人であるほど、清朝以降に立派なものに造りかえられている場合も多いので注意を要する<sup>20)</sup>。

そのような中でまず興味深いのは南宋・洪适(一一一七—一一

八四)の『隸統』である。その巻五「碑図」上に「圭首」と明記する漢代の墓碑拓本を多数挙げているからである。

たとえば前漢末・淳于長の墓碑は(図6)に見るように首部に「漢北海淳于長夏君碑」と篆額する円頭型の碑で、有名な漢碑の一つだが、洪适はこれにつき、

右淳于長碑、圭首之上有暈二重。

(右淳于長碑、圭首の上に暈二重有り。)

と、「圭首」の名で呼んでいる。暈とは縁の円弧に沿って内側に入れた凹線のことである。また、「漢故大尉陳公之碑」の篆額をもつ後漢・陳球の墓碑についても、

右陳球碑、篆額二行、黑字、圭首甚大。

(右陳球碑、篆額二行、黒字、圭首にして甚だ大なり。)

と、これまた円頭型の碑を「圭首」としている(図7)。このほか同書巻五に載せる樊敏碑、趙國令碑、婁先生碑、義井碑、唐公房碑、郭輔碑など、いずれも円頭型の形状であるが、すべて「圭首」の名で呼ばれている。

これに対して、同書は上部が尖った尖頭型の墓碑も載せている。たとえば(図8)は後漢の柳敏の墓碑で、一見これこそが圭首の形のように思われるのだが、意外にも圭首とは呼ばれていない。ちなみに柳敏墓碑は現在、四川省に現存しており、(図9)<sup>33)</sup>がその写真である。このほか、六玉碑や是邦雄桀碑など、みな尖頭型であるが、圭首と呼ばれている例は一つもない。漢代にはこのよう

な尖頭型の墓碑も多数造られたようだが<sup>34)</sup>、いずれにしてもいま重要なのは漢碑の形ではなく、朱熹と同時代の洪适が、尖頭型ではなく円頭型の方を圭首と呼んでいたということである。

そればかりか、洪适のもう一つの漢碑研究の書『隸釈』巻八と巻十には、いま取り上げた「淳于長夏承碑」や「柳敏碑」、「太尉陳球碑」が著録されており、朱熹はこの『隸釈』を読んでいたことがわかつている。<sup>35)</sup> そうであれば、朱熹がこれとセットをなす『隸統』も知っていたことはまず間違いないまい。洪适は南宋初期、尚書左僕射同中書門下平章事すなわち宰相を務めた人物でもあり、その『隸釈』とその続編『隸統』は当代随一の古代碑刻研究として影響が大きく、当時の一般認識を代表していたといつてよい。つまり『隸統』の漢碑に関する記述は、宋代において圭首といった場合、一般に円頭型を指していたことを物語っているのである。

このほか、宋元時代の貴重な実例を挙げると、山東省曲阜の孔林に孔宗愿墓碑がある。周知のように、孔林は孔子以下、孔家歴代の子孫を埋葬した孔家の広大な塋域である。

孔宗愿は孔子四十六代の子孫で、北宋の至和二年(一〇五五)第一代の衍聖公となった人物である。<sup>36)</sup> (図10)<sup>37)</sup>は『曲阜孔廟建築』に載せるその墓碑で、正面に「比部員外郎襲封衍聖公之墓」と篆刻されている。<sup>38)</sup> 比部員外郎の品階は正七品(『宋史』職官志八)なので、ちょうど先にも見た喪葬令にいう「七品以上は碣を立つ。跣上の高さ四尺にして、圭首方趺」に相当する。<sup>39)</sup> 図に見るように

墓碑は円頭型であって、当時の「圭首」の形がどのようなものであったかをよく示している。また『家礼』という墓碑が宋代における七品以上の官人の場合とほぼ同様のつくりであることは上述したとおりであるから、この孔宗愿墓碑は『家礼』の述べる墓碑を彷彿とさせるものといえよう。

このほか、金の孔元措墓碑も同様である(図11)。孔元措(一一八二—一二五一)は孔子五十一代の子孫で、孔宗愿の墓碑とほぼ同じ形だという。写真を見ると、孔宗愿の墓碑よりも高さがあるように思われるが、上部が円頭形になっているのは確かに共通する。また『曲阜孔廟建築』の説明によれば、孔子墓西側にある金・大定年間の孔瓌の墓碑も同じ形式であって、金・元二代は宋代の墓碑形式を踏襲していたことがわかるという。<sup>(41)</sup>

このように宋元時代において圭首といえば尖頭型ではなく円頭型であり、それが当時、一般士人の墓碑の普通の形式だったらしい。いま朱熹の文集を見ると、『朱文公文集』巻九十一「朝奉劉公墓表」に、

其銘曰、……方趺圭首千千秋、過者視此式其丘。

(其の銘に曰く、……方趺圭首千千秋、過ぎる者此を視て其の丘に式せよ。)

とあり、卷九十三「転運判官黃公墓碣銘」に、

其詩曰、……故山北東、有坎其墟、我最其蹟、圭首方趺。

(其の詩に曰く、……故山の北東、坎たる其の墟有り、我れ其

の蹟を最る、圭首方趺。)

とある。これを見ると圭首方趺の墓碑がごく普通に立てられていたことがわかる。その形状について朱熹がいちいち説明していないのは、圭首といえはすぐに円頭型だとわかったからであろう。

ところで、朱熹自身の墓碑はどうなっているのだろうか。福建省建陽県に現存するその墓は朱熹と夫人劉氏との合葬墓で墓碑正面に「宋先賢 朱子(左側) 夫人劉氏 墓」と朱字で刻んである(図12<sup>(42)</sup>)。形状は写真に見るとおり円頭型で簡素なつくりである。夫婦合葬墓というのは『家礼』にはない方式であり、朱熹の強い意向によってなされたものであるが、それはともあれ墓碑について考えてみると、朱熹は死去当時の官(寄祿官)は朝奉大夫であって、その官階は従六品だから(『宋史』職官志九)、上述したとおり喪葬令に従えば「圭首方趺」になる。もちろん、『家礼』どおりに作ったとしても、同じく「圭首方趺」になることはすでに述べたとおりである。この墓碑は朱熹当時のものではなく、清の康熙五十六年(一七一七)に新たに立てられたもので、<sup>(43)</sup>当時の礼制からすると「円首方趺」になるのだが、がんらいの形状を伝えるものであるかもしれない。新たに墓碑を立てる際、『家礼』にいう「圭首」を考慮した可能性もあるからである。<sup>(44)</sup>

ただし、正面に刻まれる「朱子」という尊称はもちろん朱熹の存在が知れわたった後世の言い方であって、『家礼』の方式に従えば「有宋朝奉大夫朱公之墓」とでもなることであろう。



以上、限られた資料ではあったが、宋元時代において圭首とは尖頭型ではなく円頭型であったことが確認されたと思われる。実際この時代、上部の尖った尖頭型の墓というものを見出すのは困難である。南宋以降、『家礼』式の墓がどの程度造られたのかは今後の調査を待たなければならないが、近世中国において尖頭型の墓碑というものの存在は寡聞にして知らない。そうしたことから見ても『家礼』にいう墓碑がもととタイプAの円首型であったことは間違いないと思われる。

このことは、朝鮮における『家礼』式墓を見ることによっても確かめられよう。

## 2 朝鮮

『家礼』を中国以上に重視し、これを忠実に実践してきた朝鮮では『家礼』式墓の実例を数多く見ることができる。そもそも朝鮮王朝一代の儀礼法典となった『国朝五礼儀』を見ると、士大夫・庶人の墓碑の記述は『家礼』をそのまま踏襲しており、この時代の士人はみな『家礼』にのっとって墓を営んでいた。それはどのような形状だったのであろうか。

まず、朝鮮王朝時代に数多く書かれた『家礼』の注釈書に墓碑の形状を描いたものがある。その例は多いが、たとえば、礼学の大家だった金長生（一五四八―一六三一）の労作『家礼輯覽』に載せる図は〈図13〉のとおりである。

これを見るとわかるように、墓碑上部に「圭首」と明記され、形状は上部がなだらかに円まった円首型になっている。また墓碑の高さが「四尺」、跌は方跌で高さが「尺許」であること、墓碑正面に「某官某公之墓」と刻むこと、「世系・名字」を墓碑の向かって左面から後面、そして右面へとぐるりと刻むことなど、『家礼』の方式をよく守っている。ただ一つ、周囲に石羊、石虎、石人、石望柱などが配されているのは、宋の喪葬令にいう「其石獸、三品以上六、五品以上四」や『明集礼』卷三十七上・凶礼二「品官喪儀」、「墓壙」の記述などにより高官の場合のつくりを記したもので、これだけが『家礼』にはないところである。

このような墓碑のつくりは朝鮮においてはほぼ定式化していたようで、金長生の著作に続く朝鮮『家礼』研究の代表作、尹宜挙（一六一〇―一六六九）『家礼源流』に載せる図（図14）も同様の墓図を載せている。墓碑上部に「圭首」と記され、円首型で描かれていることに注意されたい。もう一つ、李宜朝（一七二七―一八〇五）『家礼増解』はそれまでの『家礼』研究を集成した朝鮮王朝後期を代表する儀礼書として定評があるが、その墓碑図はこれまたほとんど同じであって（図15）、相互に継承性があることがよくわかる。

そもそもこの時代、朝鮮では圭首といえば円頭の形を意味していたらしく、李圭景（一七八八―不詳）の『五洲衍文長箋散稿』は柩の作りに関して「四板之頭、并上出數寸而圓刻之如圭首」とい



っている。少しわかりにくい<sup>46</sup>が、これは柩本体を取り囲む上下左右の板を数寸出っ張らせ、先端を削ることをいうらしく、それを「円く之を刻ること圭首の如し」と述べているのである<sup>47</sup>。

さて『家礼』の注釈・研究書はこのとおりであるが、実際に造られた朝鮮士人の墓にもこうした円首型の墓碑が多く見られる。

たとえば、金長生の師で朝鮮を代表する朱子学者李珥（一五三六―一五八四）の墓碑は〈図16〉に示したように上部がなだらかに円く、タイプAの圭首型を示している<sup>48</sup>。幅が広いのは右に見た朝鮮の『家礼』関係図の場合と同じで、もともと『家礼』では一尺（二三・二センチ）以上<sup>49</sup>としていたので、それに沿った所作なのであろう。墓碑表面には「文成公栗谷先生之墓」と刻まれ、すぐ左側に「貞敬夫人谷山盧氏墓在後」と刻まれる。後部に墳土があり、墓碑とほぼ同じ高さなのも『家礼』に忠実なつくりを保っているといえよう。

〈図17〉は金長生の父金繼輝の墓であり、これも李珥の場合と同じ円頭型である。また〈図18〉は鄭齊斗（一六四九―一七三六）の墓碑で、その忌日（命日）に挙行された墓祭で筆者が撮影した写真である<sup>49</sup>。これも以上の学者と同様、幅のやや広い円頭型の墓碑であり、表面には「朝鮮議政府右贊成兼／世子貳師成均館祭酒諡／文康公鄭先生齊斗之墓」と刻まれている。鄭齊斗は陽明学者であるが、その礼学が『家礼』に沿うものであったことはかつて論じたことがあり<sup>50</sup>、墓制もまた『家礼』方式によっているわけ

ある。

これらのうち李珥および金繼輝の墓は墓碑に本人と妻の名が並んで刻まれ、妻の墓が本人の墓の後ろにあつて合葬墓の一変形を示しているが、これはたぶん朱熹の影響であろう。金長生の門人で朱熹崇拜者であつた宋時烈（一六〇七―一六八九）が、合葬は朱熹の葬法として容認されると述べているからで、朱熹の墓碑が朱熹本人と妻の名を並んで刻んでいることはすでに見たとおりである。

ついでに言えば、朝鮮の場合では中国と同じく、墓主が高官にのぼつた場合は『家礼』式の小型で簡素な圭首式ではなく、螭首龜趺などの立派な墓碑が立てられる。一つだけ例を挙げれば金誠一（一五三八―一五九三）の墓碑がそうであり、〈図19〉に見るように上部が圭首ではなく螭首の形状になっている。李滉門人の金誠一は秀吉の朝鮮出兵時期、官僚としても活躍した名臣で、死後、弘文館大提学および芸文館大提学を追贈されている<sup>51</sup>。これらは正二品に相当するから（『経国大典』巻一）、その地位にふさわしい形式になっているわけである。

以上に見たように、朝鮮王朝時代には『家礼』にもとづく墓が多く営まれ、また書物に記載された。その形状がタイプAの円頭型であり、それはまた『家礼』のものと形状を示していると見てよい。朝鮮の学者が度重なる燕行使や清国勅使の来訪などを通して中国の墓について見聞する機会に恵まれていたことを考えれば、

彼らの墓が多く『家礼』の旧を伝えているのも当然といえは当然であろう。

ここでもう一つ注意したいのは、タイプBに属する尖頭型の墓碑が朝鮮には見出しがたいように思われることである。これまで朝鮮における『家礼』式墓というものは寡聞にして調査・研究されたことがないようであり、あくまでも筆者の限られた知見による判断であるが、そのように考えられる。

ところが日本では中国・朝鮮とは違って、尖頭型の墓碑が多数造られた。これは日本独自の特色として注意を要する。次に、日本における『家礼』式儒墓はどのようなものであったのかを検討してみたい。

### 三 日本における『家礼』式儒墓——林羅山ら林家

『家礼』が日本で広く読まれるようになった江戸時代には、儒者を中心に『家礼』にもとづく墓がしばしば作られた。以下、筆者が調査した範囲で、おおむね時代順に取り上げてみよう。

紹介にあたっては上述した『家礼』式墓碑の特色をふまえ、(一)円頭型(タイプA)か尖頭型(タイプB)かをまず示し、ついで(二)墓碑正面に刻まれた文字をかぎ括弧つきで掲げる。さらに可能な限り(三)碑身の寸法(センチ)を高さ×幅×厚さで示す。高さは碑身の底部から圭首のてっぺんまでの高さである。(四)趺の形と高さも示す。趺は二段もしくは三段になっていることもあるが、こ

こでは上部(第一段)のみの高さを記す。また(五)墓碑の周囲に履歴などの文字が刻まれていればそれについて記し、さらに(六)墳土の有無、および(七)所在地を示す。そして(八)説明を付すが、紙幅の關係上、墓主の伝記紹介や細部の考証は省き、必要最小限の指摘にとどめることにする。また(九)墓碑の写真はできるだけ載せるようにする。

#### 1 林羅山ら——林家その一

林左門(一六一三—一六二九)〈図20<sup>53)</sup>〉

円頭型(タイプA)

「於乎林左門之墓」

碑身 百十四×三十七×三十一

趺 方趺 地中に埋もれていて高さは不明

背面に「寛永六年己巳夏六月 日 林道春記」と刻む

墳土 なし

所在 東京都新宿区市谷山伏町・林氏墓地

墓域は林氏墓地として国史跡に指定され、現在、林羅山以下、林家八十一基の墓碑が林立している。元禄十一年(一八九六)、第三世鳳岡の時代に牛込のこの地に屋敷地を賜り、その西北隅に新たに墓地が営まれた。そこに羅山や鷺峰ら初期の墓は当初の墓地であった上野忍岡から改葬され、その後、明治以降徐々に縮小されて現在に至っている。<sup>54)</sup>

左門は羅山の長男で諱は叔勝、字は敬吉。寛永六年（一六二九）六月に十七歳で死去した。背面に刻まれた「林道春」はいうまでもなく羅山である。

羅山はその埋葬にあたって墓誌銘を作っている。「林左門墓誌銘」（『林羅山文集』巻四十三）がそれで、そこに「叔勝曰、吾死勿用浮屠礼儀。……命工削石築方墳、高三尺、径五尺五寸、環龜而堆。立碣于其上以表之、象圓首方趺也」という。これによれば「浮屠」（仏教）の儀礼を嫌った左門の遺志により儒葬し、「石を削りて方墳を築く」という。石垣を巡らせて内側に墳土を突き固めたということであろうか。墳土の高さは三尺、一辺が五尺五寸、さらにその墳墓の上に「円首方趺」の碣を立てたというから、『家礼』が墳墓の前に墓碑を立てるのとは違っている。「円首方趺」とは明代の制度でもあるから、これは『家礼』のほか明令なども参照したうえで墓碑を作り、独自の墓型を考案したものと思われる<sup>(55)</sup>。碑面冒頭に「於乎<sup>あゝ</sup>」と刻むのもかなり特異で、長子の夭折を悲しむ羅山の嘆きをヴィヴィッドに伝えている。左門の死去に際しては羅山の友人松永尺五が「林叔勝晩詞并序」<sup>(56)</sup>を書いており、将来を嘱望された秀才だったという。

墓誌銘によれば墓は江戸・海禅寺内の一小丘に営まれたが、のち上野忍岡の羅山の別墅に改葬されたいし（後述）。その後、この地に改葬されて墳土は失われ、また墓誌銘が刻まれていたはずの誌石も現在は見当たらない<sup>(57)</sup>。

この墓は、明確に儒式とわかる墓で日本に現存するものとしては最早期のものとして注目される。また墓誌銘をとまなうことも留意されるが、ただし『家礼』式とは形状などに違いもあり、寸法も羅山らの墓碑に比べてかなり大きい。林家の墓碑はあとにいう羅山の妻（荒川亀）および羅山に至って定式化するが、それ以前に羅山が造った儒式墓の試みと見られる。

林永喜（一五八五—一六三八）〈図21〉

円頭型（タイプA）

「刑部卿法印林永喜碑」（篆題 正面の上部杵に右から横書）

碑身 百二十五×四十五×三十六・五

趺 方趺 地中に埋もれていて高さは不明

正面の杵内に羅山撰の「刑部卿法印樗墩林永喜碑銘」を細字でびっしりと刻む 文末「寛永十五年戊寅冬十二月四日

孝子永甫 立」。

墳土 なし

所在 同右

永喜は羅山の弟で、号は東舟、のち樗墩。寛永十五年（一六八三）八月没。篆題にいう「法印」はがんらい僧侶の最高位だが、当時、儒者や医師などにも授けられた官位であった。ちなみに羅山は民部卿法印に叙せられている。これが戒名ではないことに注意されたい。文末の「永甫」は永喜の次子である。

形はタイプAの円頭型で、碑銘（墓碑文）は『羅山文集』巻四

十三にも「刑部卿法印林永喜碑銘」として載せる。そこに「不用異教」（異教を用いず）ということから儒式墓であることは明らかだが、かなり大きなつくりで、正面枠内に碑銘をびっしりと刻むのも独特であり、右手前の羅山の墓と比べると形状の違いがわかる。林左門のものと同様、林氏の墓碑が定式化する以前、明制などを参照した試行的儒墓といえよう。

荒川亀（一五九八―一六五六）〈図22〉

尖頭型（タイプB）

「順淑孺人荒川氏龜姫之墓」

碑身 七十八×二十三・五×十五・五

趺 方趺 十三・五（地上部分）

背面に「明暦二年丙申季春 孝子春齋林 恕立」と刻む 墓

碑の右手前の「開祖配順淑夫人墓位」と刻む標石は後世

のもの

墳土 なし

所在 同右

荒川亀は羅山の妻で鷲峰らの母。明暦二年（一六五六）三月没。その葬儀はできるだけ『家礼』に沿ったやり方で行なわれ、万知二年（一六五九）刊行の鷲峰『泣血余滴』にその経緯が詳細に記録された<sup>(58)</sup>。碑面という「順淑」はいわゆる私諡、「孺人」は中国ふうの夫人の尊称である。背面の「春齋林 恕」は鷲峰である。『泣血余滴』および「羅山年譜」<sup>(59)</sup>によれば、墓はもともと上野忍岡の

羅山別墅に葬られ、馬鬣封（馬の鬣<sup>たてがみ</sup>のようにやや細長く、上部が狭くなる形）の墳土が造られたが、現在、その墳土はない。この馬鬣封形式というのは『家礼』にはなく、もともと『礼記』檀弓篇上に孔子が理想とする墳形として述べるもので、鷲峰らは墳土についてはあえて古い形式をみずから選択したことになる<sup>(60)</sup>。

〈図23〉は『泣血余滴』に載せる荒川氏の小石碑図で、「據家禮而用周尺、碑首如圭形」（家礼に拠りて周尺を用い、碑首は圭の形の如し）というところから「圭首」の形に造られたことがわかるが、円頭型ではなく、タイプBの尖頭型になっている点が注意される。また大きさについてであるが、この図には寸法が、

高四尺、今尺二尺五寸五分餘

厚七寸九分、今尺五寸一分

闊一尺一寸八分、今尺七寸六分

と記されている。「高四尺」などという前の部分が『家礼』にもとづく周尺であり、あとにいう「今尺」が日本の曲尺にあたる。同書卷上に載せる「先妣順淑孺人事實」によると、周尺の正確な長さがわからなかった鷲峰は、友人と考証してこれを定めたという<sup>(61)</sup>。いま墓碑の高さについて見ると、「今尺二尺五寸五分餘」は三十三センチ×二・五五余で七十七センチあまりということになり、現存の墓碑の高さとはほぼ一致している。ただし、これが周尺の四尺に当たるといっているのが、周尺一尺の長さは十九・三センチ弱ということになってしまう。上述したように、朱熹の時代という周

尺は二三・一センチだから、鷲峰の計算は正しくなく、これよりも短かったことになる。幅や厚さについても同様であり、結果としてこの墓碑は『家礼』の所説よりも小型になっているのである。高さだけを取り上げてみても、『家礼』の場合九十二・四センチであるから、それよりも十五センチほど低いことになる。

なお、「先妣順淑孀人事實」によれば墓誌は造らなかったというから、誌石も造られなかったらしい。墓碑にも履歴は刻まれない。いずれにしても、この墓碑は日本において尖頭型の圭首をもつ『家礼』式の例としてはかなり早く、野中兼山による野中順、秋田萬の墓碑（後述）について古い。またこれ以後、林氏の墓碑は羅山にせよ鷲峰にせよ、天保年間、林述斎によって改変されるまで、ほぼこのつくりが踏襲される。この尖頭型の墓碑は『泣血余滴』の刊行とあいまって日本における『家礼』式儒墓の一モデルになったのであって、その意味できわめて重要な意味を持つといえる。<sup>62</sup>

林羅山（一五八三—一六五七）〈図24〉

尖頭型（タイプB）

「文敏先生羅山林君之墓」

碑身 七十八×二十三・二×十五・三

跌 方跌 十九（上部）

向かって右面から背面、左面へと履歴を刻む（左行↓右行の

順） 文末「明暦三年丁酉三月中旬 孝子春齋林恕誌

／門人坂伯元書」

日本における『家礼』式儒墓について

墳土 なし

所在 同右

羅山は妻荒川氏の死去翌年の明暦三年（一六五七）一月に没した。碑面の「文敏」は鷲峰らによる私諡、「春齋林恕」は鷲峰である。「羅山年譜」および鷲峰『後喪日録』によれば、羅山はもと上野忍岡の別墅に葬られた。墳土は『家礼』に従って周尺で高さ四尺、これまた馬鬣封で、墓前に小石碑を作って履歴行実を刻んだ。また当時、荒川氏および永喜、叔勝（左門）の墓も傍らにあったという。<sup>63</sup>現在、馬鬣封の墳土はなく、他の墓の場合と同様、この地に改葬されるなどするうちに失われたものであろう。

墓碑の形状は左右対称で上部をすっきりと尖らせた稜角をもつ、いわゆる将棋型（Bタイプ）であって、日本の『家礼』式墓碑における尖頭型の典型を示している。典型というのは、これ以後、林氏歴代の墓碑はもちろん、この形が林家の権威とあいまって日本の同種の墓碑として普及、定着するからである。

大きさが妻荒川氏のものとはほぼ同じで『泣血余滴』の記載のつとっていることも注意される。荒川氏の墓の場合、跌の高さだけは底部が地面に埋もれていて不明だったが、羅山の場合は十九センチである。これは『泣血余滴』にいう「跌高九寸三分半 今尺六寸」に合致するもので、今尺（曲尺）の六寸は十八センチあまりにあたる。つまり、これまた尺度計算の違いにより『家礼』本来の大きさよりもひと回り小型になっているのである。このあ



と見る他の例からして、『家礼』式墓碑、したがってまた儒式の墓碑といえ、江戸時代の人々はまずこの羅山の墓碑を想起し、模範としたと考えられるのであるが、このやや小ぶりの墓碑が以後、日本における『家礼』式墓碑の一モデルになることからして、その意義はきわめて大きいといわなければならない。

なお、履歴の刻み方は向かって右面から背面、そして左面へとという独特の順序になっている。『家礼』にいう左面と右面を、向かって左・右ではなく、墓碑本体の左・右と解しているのである。かつて朝鮮の李滉『自省録』が神主（いわゆる位牌）の左・右を、神主自体の左・右と解釈したことがあり、これはそれにもとづく所作であつたらしい。<sup>64</sup>そのため、文章も左行から右行に書き進むという、通常の縦書きの場合とは逆の書き方になっている。これは次に述べる鷺峰や読耕斎、鳳岡の場合も同じである。<sup>65</sup>

誌石については年譜や行状、鷺峰『後喪日録』のいずれにも記載がないので造られなかったようである。おそらく墓碑に刻んだ履歴を墓誌の代わりとしたのであろう。前述したように、本来、墓碑に刻む履歴（墓碑文）と誌石に刻む墓誌とは違うのであるが、羅山の場合は墓碑に刻んだ履歴を墓誌の代わりにする先例を作ったことになるかもしれない。

林長吉（一六一六—一六二〇）  
〈図25<sup>66</sup>〉

尖頭型（タイプB）

「林孺子長吉之墓」

所在 京都市歴史資料館蔵

長吉は羅山の次男で、元和六年（一六二〇）十一月、天然痘によりわずか五歳で死去。京都壬生の寺院に埋葬される。この頃、羅山はまだ江戸に定住しておらず、京都との間を往還していた。その後、明暦三年（一六五七）五月、長吉の墓は羅山が徳川家康から賜わった知行地の京都二ノ瀬に改葬されることになる。このことについて鷺峰『後喪日録』の同年三月十八日条は、

長吉天亡。聞其荒墳在壬生邊蘭若、可移葬之於先考采邑内、改築墳墓而立小石碑。（『後喪日録』中、第五葉裏）

（長吉天亡す。其の荒墳壬生邊の蘭若に在りと聞けば、之を先考の采邑内に移葬し、改めて墳墓を築きて小石碑を立つべし。）

といっている。ここにいう「先考の采邑」というのが羅山の知行地であり、「蘭若」は寺のことである。ついで五月二日条によると、鷺峰は長吉の改葬を命じるとともに「小石碑誌」を撰して京都に送った。その碑誌は「林孺子長吉之墓」と題し、さらに長吉の履歴を記すもので、履歴の末尾には、

命京洛舊宅處守者、移葬於 先考采地二瀬邊、改築墳墓、立小石碑於其前。其製法聊拋朱文公家禮。（『後喪日録』下、第二五葉裏）

（京洛の旧宅の処守者に命じて、先考采地の二瀬辺に移葬し、改めて墳墓を築き、小石碑を其の前に立つ。其の製法は聊か



### 朱文公家札に拠る。

と記されている。ここに「其の製法は聊か朱文公家札に拠る」というように、この墓碑もやはり『家札』式、それも尖頭型になっている。その後、この墓の側には延宝二年（一六七四）、林氏の家廟「奉先堂」が建てられて代々奉祀されてきたが、明治以降は荒廃し、現在は墓碑のみが京都市歴史資料館に保管されているのである。<sup>(67)</sup>

もしこの墓碑が長吉の死後すぐに立てられたとしたら、前述の左門（叔勝）より九年ほど早いから、日本で最古の『家札』式儒墓ということになるが、実際は明暦三年（一六五七）五月の改葬時の建立であるから、それよりも遅れる。鶯峰により、同年一月の羅山の墓碑にならって造られたもので、写真で見る限り羅山の墓碑と大きさ、形状ともほぼ同様と思われる。

この長吉の墓碑はこれまで論じられたことがないようだが、こうして経緯をたどってみると、『家札』の尖頭型墓碑が林家の方式として鶯峰の手により定着していくことがわかる。

### 林読耕斎（一六二四―一六六一）〈図26〉

#### 尖頭型（タイプB）

「貞毅先生讀耕齋林君之墓（右下）孝子勝澄立」

碑身 七十八×二十四×十五・五

方趺 十八・二（上部）

向かって右面から背面、左面へと履歴を刻む（左行↓右行の

日本における『家札』式儒墓について

順）文末「萬治辛丑四月上旬 家兄向陽林子誌／門人金節書」

墳土 なし

所在 林氏墓地

読耕斎は鶯峰の弟で羅山第四子。碑面にいう「貞毅」は他と同じく私諡であり、右下に記される「勝澄」は読耕斎の子の晋軒である。履歴末の「向陽」は鶯峰の別号である。

読耕斎の葬儀および墓碑の作成に関しては鶯峰の「哀悼任筆五条」（『鶯峰林学士文集』卷七十五）の其五に詳細が説明されている。それによれば墳墓は高さ四尺で馬鬣封、墓碑についても「其尺寸如家禮、詳見餘滴」というように『家札』および『泣血余滴』によっている。ただ、墓碑正面の向かって右下に「孝子勝澄立」と刻むのは他にあまり見られない書式である。これは、『家札』では神主の正面下に「孝子某奉祀」と記すことになっており（卷四・喪札・題木主、および図の神主式）、おそらくそれを墓碑に応用したものであろう。

墓碑面に奉祀者の名を傍題するこの方式は日本の儒式墓にたまに見られるが、『家札』の応用とはいえず、『家札』の墓碑本来の方式ではない。このことについて、のちに浅見綱斎は、

墓表ニ孝子某建ト書付ルコト、神主ノ奉祀カキヨリアヤマロテ、サウシキタル文盲ナコトナリ。書ニ及バヌコトナリ。（「常話割記」<sup>(68)</sup>）

と批判している。

誌石に関しては「哀悼任筆五条」に何も記されていないので、造られなかったらしい。羅山の場合と同じく、墓碑に刻まれた履歴を墓誌としたものと思われる。

林鷺峰（一六一八一―一六八〇）〈図27〉

尖頭型（タイプB）

「文穆先生學士林君之墓」

碑身 七十九・五×二十四×十五

趺 方趺 十八・五（上部）

向かって右面から背面、左面へと履歴を刻む（左行↓右行の

順）文末「延寶八年庚申五月下旬 孝子整宇林鸞」

墳土 なし

所在 同右

鷺峰は羅山の三男で、林家第二世。延宝八年（一六八〇）五月に没した。碑面の「文穆」は私諡であり、「學士」というのは寛文三年（一六六三）に「弘文学院學士」の称号を幕府から得たからである。文末の「整宇林鸞」は鷺峰の子の鳳岡である。大きさ、形状とも羅山の墓碑にはほぼ等しい。碑面の履歴は『鳳岡林先生全集』巻百十三に「文穆先生學士林君墓誌」として載せている。<sup>69</sup>鷺峰が林家の墓制を整備したことはすでに述べたとおりである。

林鳳岡（一六四五―一七三二）〈図28〉

尖頭型（タイプB）

「朝散大夫内史正獻先生林君之墓（右下）哀子朝散大夫國子祭酒林信充立」

碑身 七十八・五×二十五×十五・八

趺 方趺 十四（地上部分のみ）

履歴は向かって右面から左面へ、さらに裏面へと移る 文末

「享保十七年壬子七月乙酉朔 中大夫丹治直邦謹識」

墳土 なし

所在 同右

鳳岡は鷺峰の次男で、林家第三世。諱は鸞、一名信篤。享保十七年（一七三二）六月に死去した。碑面の「朝散大夫」は正五位上の官位に相当し、「内史」は奥右筆（幕府の書記係）の唐名である。「正獻」は私諡。「林信充」は鳳岡の子の榴岡で、肩書の国子祭酒は大学頭のことである。元禄四年（一六九二）、湯島に設立された聖堂の責任者をいい、鳳岡が初めてこれに任ぜられ、のち林家で継承された。

履歴は向かって右面から左面へ、さらに裏面に移って終わるという変則的な順番になっているが、文章は羅山や鷺峰の場合と違って、右行から左行へと進む通常の書き方である。なぜこのようになったのかは未詳だが、一つには正面（碑陽）と背面（碑陰）を相対させるという考え方によるのであろう。この履歴は現在、『鳳岡林先生全集』付録に「朝散大夫内史鳳岡先生林君碑銘<sup>并序</sup>」として載せる。

墓碑のつくりは基本的に羅山らと同じであるが、ただ、誌石を持つ点が違っている。誌石はこれまで見たように、林家では林左門を除いて造られなかったようだが、鳳岡に至ってまた作成されるようになった。これは林家の地位の向上と関係があるようで、以後、第四世榴岡、第五世鳳谷、第六世鳳潭、第七世錦峰はみな誌石が見つかった<sup>(20)</sup>。整地や改葬の際に地下から見出されたものらしく、鳳岡以後、林家の伝統になったようである。誌石の製作が『家礼』にもとづく所作であることは上述したとおりである。墓誌は墓碑に刻まれた履歴（墓碑文）に比べて短く、別の文章であることも『家礼』に合致している。

#### 他の林氏

林氏墓地には尖頭型の『家礼』式儒墓が他にも多く並んでいる。しかし、そのつくりは羅山のタイプB型とほぼ同じで、第四世榴岡、第五世鳳谷、第六世鳳潭、第七世錦峰らの墓碑は大きさ、形とも統一されているのでここでは割愛する。女性の場合もほぼ同じつくりで、殤子の場合はやや小さいという程度である。また、墳土についていえば馬鬣封とするのが荒川亀・羅山以来の林家の伝統であったが、現在、残念ながら往年の墳土を残す墓は一つもない。

#### 2 林述斎ら——林家その二

林氏墓地には、林家を再興した第八世林述斎以下、第九世樸宇、第十世壮軒、十一世復斎の墓もある。これらは比較的大きなつく

りで、墓碑こそタイプBの尖頭型であるが、石畳で各墓所を区切るなど規模が比較的大きく、それまでの林家歴代の墓とは異なる形態をとっている。述斎（一七六八—一八四一）とその門人佐藤一斎（一七七二—一八五九）により、新たな方式の儒墓が考案されたためである。もちろんこれらも『家礼』がベースになっているのだが、いくらか複雑な事情を含むため、その考察は別の機会に譲ることとする。

#### 結びにかえて

本稿ではまず、『家礼』にいう墓はどのような形状と大きさをもつのか、それは中国礼制上においてどのような意味を持つのか、また『家礼』にもとづいて立てられた『家礼』式儒墓は中国や朝鮮では実際にどのようなつくりだったのかなどにつき検討した。『家礼』は地位や身分を超えた、士人と庶人いずれにも当てはまる墓のつくりを構想している。「圭首方趺」の墓碑と、「墓誌銘」を刻んだ誌石もつ墓を造るのは中国の礼制では中級官僚以上の者のみ許された官人の特権なのであったが、『家礼』はそうしたおかみの礼制とは違って、より普遍的な墓制を大胆にも提示していた。次に、『家礼』の記述する墓碑を復原してみた。「圭首」の形は本来は上部がゆるやかに円まった円頭型（タイプA）だったらしく、そのことは宋元時代の例や朝鮮の『家礼』研究書および墓制が示しているとおりでである。

興味深いのは、日本でそれとは違う、上部が尖った尖頭型（タイプB）の墓碑が造られたことである。これはもともと「圭」の語が円頭と尖頭の二つ解釈を許すものだったからで、林家の荒川亀および林羅山の墓に始まるタイプBの尖頭型墓碑は、中国や朝鮮とは異なる日本独自の形を示している。『家礼』のものと形の伝ええると思われる孔宗愿墓碑や朝鮮儒者たちの墓碑と比べるとその特異性がわかるであろう。しかも「周尺」の計算方式の違いにより、この林家モデルは『家礼』本来の墓碑よりも、高さにして十五センチほど小型になっているという特徴もある。

本稿は日本の『家礼』式儒墓の例としては林家の墓しか取り上げることができなかった。このほか大名の墓にも『家礼』の影響を受けたものがあり、尾張藩の徳川義直、水戸藩の徳川光圀、岡山藩の池田光政など、その十七世紀中葉における造墓は『家礼』の影響が顕著である。しかし、彼らの墓は大名（諸侯）としての地位と風格を考慮した大規模なものであって、普通の士庶を対象にした『家礼』とは違う墓制になっていることも事実である。その意味で彼らの墓は『家礼』の影響を受けてはいるが、必ずしも『家礼』式とはいえない。よってここでは考察の対象とはしなかった。

江戸時代において『家礼』式儒墓は他にも多い。それらの検討については次号に譲ることとする。

## 注

- (1) 近藤啓吾「浅見綱斎墓域修理記録」（近藤「浅見綱斎の研究」所収、神道史学会、一九七〇年）、松原典明「近世大名葬制の考古学的研究」（雄山閣、二〇一二年）、同「近世大名葬制の基礎的研究」（雄山閣、二〇一八年）、北脇義友「岡山市東山墓地における儒葬墓——江戸時代前期を中心にして——」（『石造文化財』七、石造文化財調査研究所、二〇一五年）。
- (2) その意味で川勝政太郎『日本石材工芸史』（綜芸舎、一九五七年）が「墓碑」の項で「古くから行われて来た石塔婆、即ち石塔と近世の墓碑とは、内容的に全く異なるものである」といつているのは、古い記述だが、仏や菩薩を崇拝する供養塔としての石塔と、墓主の標識としての墓碑とを区別している点で正しい理解と考えられる。
- (3) 「礼記」檀弓篇上に「孔子既得合葬於防。曰、吾聞之、古也墓而不墳。今丘也、東西南北之人也、不可以弗識也。於是封之、崇四尺」という。
- (4) 天一閣博物館他「天一閣藏明鈔本天聖令考証」下（北京・中華書局、二〇〇六年）三五六頁。
- (5) 『書儀』卷七・喪儀三・碑誌に「喪葬令、一品墳高一丈八尺、每品減減（二）尺、六品以下不得過八尺。又五品以上立碑、螭首龜趺、趺上高不得過九尺、七品已上立碑、圭首方趺、趺上高四尺」という。
- (6) 朱熹撰の朱松行狀「皇考左承議郎守尚書吏部員外郎兼史館校勘累贈通議大夫朱公行狀」（『朱文公文集』卷九十七）に「竊惟納銘幽堂、具著声烈、以告万世、蓋自近古以來未之有改。而公贈官通議大夫、正第四品、準格又當立碑、螭首龜趺、其崇九尺、刻辭頌美、以表于神道、用敢追述其平生論議行實之次者如右、以請于当世立言之君子」という。その神道碑は友人の周必大が書いている。「史館吏部贈通議大夫朱公松神道碑」（『文忠集』卷六十九）がそれで、題下に「嘉泰三年」の年次があるので、朱松神道碑は朱熹の死後、嘉泰三年（一二〇三）以降に立てられたであろう。この朱松神道碑は、残念ながら残っておらず、

現在立つのはちに重立された碑である。武夷山朱熹研究中心編『武夷勝境理学遺迹考』（三聯書店上海分店、一九九〇年）の「朱松墓」（一五五頁）参照。なお、行状にいう「銘」すなわち墓誌銘は朱熹の「皇考左承議郎守尚書吏部員外郎兼史館校勘朱府君遷墓記」（『朱文公文集』卷九十四）がそれにあたる。

(7) 刻誌石

用石二片、其一為蓋、刻云「有宋某官某公之墓」、無官則書其字曰「某君某甫」。其一為底、刻云「有宋某官某公諱某字某、某州某縣人、考諱某、某官、母氏某封某。某年月日生、敘歷官遷次、某年月日終、某年月日葬于某鄉某里某處。娶某氏、某人之女。子、男某、某官、女適某官某人。婦人、夫在、則蓋云「有宋某官姓名某封某氏之墓」、無封則云「妻」、夫無官則書夫之姓名。夫亡、則云「某官某公某封某氏」、夫無官則云「某君某甫妻某氏」。其底敘年若干適某氏、因夫子致封號、無則否。葬之日、以二石字面相向、而以鐵束束之、埋之壙前近地面三四尺間。

(8) 下誌石

墓在平地則於壙內近南先布磚一重。置石其上、又以磚四圍之而覆其上。(9) 「答李繼善」第四書簡は統いて「嘗見前輩說、大凡誌石須在壙上二三尺許、即它日或為畚鍤誤及、猶可及止。若在壙中、則已暴露矣、雖或見之、無及於事也。此說有理」という。もし誌石を壙の中に埋めてしまったら、誌石が見つかつた時点で遺体を納めた墓は暴かれてしまっている。しかし壙のうえに、三尺であれば、誌石が見つかつた時、この下にその人の墓があると知られるから墓は暴かれずに埋め戻してもええるというわけである。

(10) 「家礼」のもつ近世的新しさについては、吾妻重二「宋代の家廟と祖先祭祀」（小南一郎編『中国の礼制と礼学』所収、朋友書店、二〇〇一年）で指摘した。この場合「近世」とは身分や地位の支配する「中世」とは違うという意味を込めている。

(11) 「家礼」巻頭「家礼図の「尺式」は朱熹の自作ではないが、すぐ前の

「檀輅藉式」の潘時拳識語によれば、この「尺式」は朱熹門人の潘時拳が朱熹の指示にもとづいて見出した司馬光家伝の図によっている。「程氏文集」巻十、作主式の小注にも「用古尺」とあり、この「古尺」も周尺と見られる。なお、尺の単位については朱熹も問題にしているが、こゝでその議論は省略する。詳細はいま挙げた家礼図の「尺式」および「檀輅藉式」潘時拳識語、『朱文公文集』卷六十の「答潘子善」第十書簡を見られたい。

(12) たとえば、周尺につき二〇〇二年版『全訳漢字解』（三省堂）は十八・〇センチとし（一七四〇頁）、二〇一七年版『新字源』（角川書店）は二十二・五センチとする（一六七五頁）。

(13) 度量衡に関する現在最も包括的な研究、丘光明ほか著『中国科学技術史 度量衡巻』（科学出版社、二〇〇一年）は、周尺については諸説紛々だとし、「実際のところ、西周における長さの単位は今に至るまで依拠するに足る確実な実物もしくは文献を見出すことができない」と述べている（七〇頁）。小泉袈裟勝『度量衡の歴史』（原書房、一九七七年）五頁にも同じ指摘がある。

(14) 曾武秀「中国歴代制度」（河南省計量局主編『中国古代度量衡論文集』所収、中国古籍出版社、一九九〇年）一四七頁、郭正忠「三至十四世紀 中国の権衡度量」（中国社会科学出版社、一九九三年）二八〇頁参照。このほか、前注『中国科学技術史 度量衡巻』が上記『家礼』図にいう諸尺の長さを復元しているのも有益である（三六三頁）。

(15) 常素霞『中国玉器發展史』（鶴間和幸監訳、菅野恵美翻訳、科学出版社社東京株式会社、二〇一九年）上巻、八九頁。

(16) 前注、常素霞『中国玉器發展史』上巻、一八三頁。

(17) 林巳奈夫「中國古玉の研究」（吉川弘文館、一九九一年）、四頁。

(18) 〈図1〉は前注、林巳奈夫「中國古玉の研究」三頁。この「儀礼」聘礼・記にいう圭の形は黄以周『名物図』巻二、池田末利訳注『儀礼』II（東海大学出版会、一九六四年）四〇四頁いずれも同じ尖頭型である。

(19) 〈図2〉は注17前掲、林巳奈夫「中國古玉の研究」六五頁。



- (20) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』一 (関西大学出版部、二〇一〇年) 二二三頁上。
- (21) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』五 (関西大学出版部、二〇一六年) 二七頁。
- (22) 注17前掲、林巳奈夫「中國古玉の研究」四頁。
- (23) 〈図3〉は注17前掲、林巳奈夫「中國古玉の研究」九五頁。
- (24) 〈図4〉は林巳奈夫『中国古玉器総説』(吉川弘文館、一九九九年) 五九頁。
- (25) 石田肇「江戸時代の墓誌」(『群馬大学教養学部紀要』人文・社会科学編、第五十六巻、二〇〇七年) は日本近世における墓誌にはじめて着目しこれを調査したすぐれた研究であるが、『家礼』の影響を考慮に入れておられない。これを継承した谷川章雄「江戸の墓誌の変遷」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一六九集、二〇一一年) や『事典 墓の考古学』(吉川弘文館、二〇一三年) 所載の「墓誌」(谷川章雄氏執筆) も同様。あとにいうように『家礼』式の墓が少なからず作られている以上、その墓誌についても『家礼』の影響を考えるべきである。
- (26) 『家礼』巻四・喪礼・「治葬」条でも司馬光「書儀」の説を引いて「世人又有遊宦没於遠方、子孫火焚其柩、収殮婦葬者。夫孝子愛親之肌体、故斂而藏之。残毀它人之尸、在律猶嚴、況子孫乃悖謬如此。其始蓋出於羌胡之俗、浸染中華、行之既久、習以為常、見者恬然曾莫之怪。豈不哀哉」と、火葬を批判している。
- (27) 徐師曾『文体明辨序説』(人民文学出版社、一九六二年) の「墓碑文」「墓碣文」「墓表」の条参照(一五〇頁以下)。
- (28) 司馬謐墓表は司馬光撰、司馬京立。篆額は「宋故贈尚書比部郎中司馬府君墓表」である。『司馬光塋祠碑誌』(文物出版社、二〇〇四年) 口絵および一五頁を参照。画像はCINAGE For CSAC, Fujiyoshi MASUMI's Chinese Picture Collection「司馬謐墓碑上部」(<http://www.db1.csac.kansai-u.ac.jp/cinage/detail.php?id=1324> 二〇一〇年三月一日閲覧) が鮮明である。関西大学の故藤善眞澄教授が一九九二
- 年に撮影されたもの。
- (29) 楊樹坤・彭明旭「神道碑、墓碑、墓碣、墓表概念辨析」(『新余学院学报』第二十二卷第五期、二〇一七年)、陳高華「元代墓碑簡論」(『隋唐宋金元史論叢』第七輯、上海古籍出版社、二〇一七年) 参照。
- (30) 劉子羽は朱熹少年時代の庇護者。篆額は「宋故右朝議大夫充徽猷閣待制贈少傅劉公神道碑」。また黃中美は朱熹の友人の父。碑題は「宋故朝議大夫致仕贈光祿大夫黃公神道碑」。碑文はいずれも朱熹撰ならびに書。高令印『朱熹事迹考』(上海人民出版社、一九八七年) 二六一頁以下を参照。
- (31) 宿白『白沙宋墓』(文物出版社、一九五七年)、「北宋王拱辰墓及墓志」(『中原文物』一九八五年第四期)、河南省文物局『安陽韓琦家族墓地』(科学出版社、二〇一二年) など。なお墓誌の発見は宋代においても多く、近年の主なものには郭茂育・劉繼保『宋代墓誌輯刊』(中洲古籍出版社、二〇一六年) に拓本と釈文が掲載されているが、これに対して墓碑に関する報告はほとんどない。
- (32) たとえば江西省九江市の周惇頤の墓碑は清末の光緒九年(一八八三)に、河南省伊川県にある程顥・程頤の墓碑は清の雍正年間、それぞれ立てられたもので、原型とは違っている。吾妻重二「周惇頤の墓——その歴史と現況」(『東アジア文化交渉研究』東アジア文化研究科開設記念号、二〇一二年)、同「二程の墓」(『吾妻重二「宋代思想の研究——儒教・道教・仏教をめぐる考察」所収、関西大学出版部、二〇〇九年) 参照。
- (33) 〈図9〉は高文・高成剛『四川歷代碑刻』(四川大学出版社、一九九〇年) 六九頁。
- (34) 一九七三年に天津郊外から出土した後漢・延熹八年の鮮于璜碑はその代表的なものである。尖頭型をなし、現代の学者はこれを圭形と呼んでいる。たとえば『百度百科「鮮于璜碑」』参照。
- (35) 『朱文公文集』卷八十二の「書歐陽文忠公集古錄跋尾後」に「華山碑仲宗字、洪丞相隸釈辨之」と見える。



- (36) 『続資治通鑑長編』巻百七十九、仁和二年三月丙子条、『文献通考』巻四十四・学校考四。
- (37) 〈図10〉および〈図11〉は南京工学院建築系・曲阜文物管理委員会『曲阜孔廟建築』(中国建築工業出版社、一九八七年)九八頁。
- (38) 『維基百科・自由の百科全書』(<https://zh.wikipedia.org/wiki/孔廟>、二〇一〇年三月六日閲覧)の「孔宗愿墓」による。
- (39) 『欽定統志』巻五百三十六・孔氏後裔伝一にも孔宗愿につき「字子莊、父延沢、贈諫議大夫。仁宗天聖中以從父道輔蔭補太廟齋郎。宝元二年、授国子監主簿、襲封文宣公、知仙源県事。至和二年、改封衍聖公、遷尚書比部員外郎、通判濰州、卒於官」という。
- (40) 『金史』巻百五、孔元措伝。
- (41) 注37前掲、南京工学院建築系・曲阜文物管理委員会『曲阜孔廟建築』九六頁。
- (42) 〈図12〉は蔣永台『世界葬墓文化(人)』(ソウル、太乙文化社、二〇〇八年)八二頁。この書は関西大学文学部の篠原啓方教授から借覧した。
- (43) 注6前掲、『武夷勝境理学遺迹考』の「朱子墓」参照(三〇四頁以下)。
- (44) 朱熹は死後の宝慶三年(一二二七)、太師を贈られているから『宋史』道学三、朱熹「正一品であり、それに従えば螭首亀趺の高大な墓碑を立てることもできたはずである。ちなみに清の礼制では、六品・七品の場合は「方跌圓首」と、圭首ではなく円首とされる(『大清通礼』巻五十、治葬具。明令も同様で、六品以下が「方跌圓首」とされる(『大明令』礼令、服飾等第)。
- (45) 『国朝五礼儀』巻八・凶礼「士大夫庶人喪儀に「墳高四尺。立小石碑於其前、亦高四尺。石須闊尺以上、其厚居三之二、圭首而刻其面如誌之蓋、略述其世系名字行實而刻於其左、轉及後右而周焉(婦人則俟夫葬乃立、面如夫亡誌蓋之刻)」とあり、『家礼』とほぼ同じ記述である。
- (46) 朝鮮王朝時代に著わされた『家礼』研究書については、張東宇「朝

日本における『家礼』式儒墓について

- 鮮における『朱子家礼』研究」(邊英浩・鄭宰相訳、『都留文科大学研究紀要』第七八集、二〇一三年)が詳しい。
- (47) 李圭景「五洲衍文長箋散稿」人事篇・論礼類・喪礼「古匱制弁証説」以下、〈図16〉〈図17〉〈図19〉は注42前掲、蔣永台『世界葬墓文化(地)』三四八頁、一〇八頁、七二頁参照。
- (49) 撮影は二〇一三年十月十二日。第十回江華陽明学国際学術シンポジウムに続いて挙行された、鄭斉斗逝去二百七十七年を記念する「霞谷鄭斉斗先生墓祭」の時である。
- (50) 吾妻重二「鄭斉斗の礼学——朝鮮陽明学と礼教」(『関西大学東西学術研究所紀要』第四十七輯、二〇一四年)。
- (51) 三浦國雄「朱熹の墓」(三浦『中国人のトボス』所収、平凡社選書、平凡社、一九八八年)二〇六頁。
- (52) 『鶴峯先生文集』付録卷一、年譜。
- (53) 筆者が調査、撮影したのは二〇一九年十一月三日である。以下、林氏墓地の墓は同日に調査した。
- (54) 『国史跡 林氏墓地調査報告書』(新宿区教育委員会、一九七八年)。これ以下、林氏の墓については同書も参照のこと。ただし残念ながら同書は『家礼』の記述をまったく考慮に入れていない。また注1前掲、松原典明「近世大名葬制の考古学的研究」二七八頁以下に林氏墓地の主な墓につき実測図を載せていて有益である。
- (55) 注44に述べたように、『大明令』では六品以下が「方跌圓首」。このほかまた『稽古定制』(『碑碣石獸』に、四品から七品までは「石碑円首」にして「方跌」という。この『稽古定制』の記述は『文公家礼儀節』巻五の喪礼考証にも「四品至七品、皆圓首方跌」と引かれているので、日本でもよく知られていたはずである。吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』六(関西大学出版部、二〇一六年)一六九頁下。
- (56) 『尺五堂先生全集』巻九(徳田武編集、ペリカン社、二〇〇〇年)一八八頁。
- (57) この墓誌銘については、大島晃「先学の風景 羅山長子 林 叔勝」

- (大島『日本漢字研究試論』、汲古書院、二〇一七年)に解説がある。大島論文は他に羅山や鷺峰の墓にも言及しておられるが、ただ「その名を知る者からすれば、あまりにも普通である」(傍点ママ)というだけで、墓碑が「家礼」もとづいて製作されたことを念頭に置いておられない。
- (58)『泣血余滴』は注20前掲、『家礼文献集成 日本篇』一所収。
- (59)『林羅山集』付録卷二「年譜下」(『林羅山詩集』下巻、ぺりかん社覆刻、一九七九年)。
- (60)『泣血余滴』に記録された荒川亀の葬儀については、吾妻重二「日本における『家礼』の受容——林鷺峰『泣血余滴』『祭奠私儀』を中心に」(吾妻重二・朴元在編『朱子家礼と東アジアの文化交渉』、汲古書院、二〇一二年)参照。
- (61)「先妣順淑孺人事實」に「凡尺寸從宋儒之說、皆用周尺。周尺之法、雖未詳、然余曾與有志人相議、有所考、有所證、以兼造之、故今用之」という(『家礼文献集成 日本篇』一、九頁上)。
- (62) なお、墓碑の左右の肩が円く、上部だけ尖っているのは将棋型とはやや違う形状である。ちなみに中村惕斎の『慎終疏節通考』巻四は圭首について、必ずしも「三稜」すなわち将棋型とは限らないとし、「今為圭碑者、或銳中而圓肩者、又或丈夫三稜、婦人獨稜」といっている(吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』四、九二頁下)。荒川氏の墓碑はここにいう「銳中而圓肩者」あるいは「婦人獨稜」に相当するようになっている。『慎終疏節』の撰述は『泣血余滴』よりも三十年ほどであるから、惕斎の所説は荒川氏の墓碑の形によっているかもしれない。ちなみに京都市東山区延年寺旧跡墓地の中村惕斎妻の墓碑はこの形だったらしい。寺田貞次『京都名家墳墓録』(一九二二年初版、一九七六年覆刻、村田書店)二六六頁参照。そこに「十五種一号」というのがこの形状である。ただし、残念ながら現在、中村惕斎妻の墓は失われたようである。
- (63) 注59前掲、『林羅山集』付録卷二「年譜下」、『後喪日録』(国立公文書館内閣文庫蔵、鷺峰自筆稿本)上、八葉表。
- (64) 前注『後喪日録』上、十九葉表に、墓碑文の記載につき「誌左轉及後右而周。其書式如家礼註之法」といっており、墓碑の左右をはっきり自覚しての所作だったことは明らかである。左・右の問題については『泣血余滴』巻下の自注に「今按家禮註云神主其下左旁曰孝子某奉祀。然見神主圖式則奉祀在右。朝鮮李退溪自省錄論之」云々としてこれを論じている(『家礼文献集成 日本篇』一、一九頁上。李滉の議論は『自省錄』「答金伯崇富仁可行富信惇叙富倫父喪遷母墓合葬等札」(和刻本、八葉表)に見える。ついでにいえば、若林強斎『家礼訓蒙疏』もまた「其左ノ左、後右之右、疑當換置之。其字ハ墓表ヲ指ス」と、墓表(墓碑)自体の左および右をいうかもしれないと述べる(巻三・成墳条、『家礼文献集成 日本篇』一、二二三頁上)。
- (65) 羅山はじめ他の墓碑文(墓誌)は注54前掲『国史跡 林氏墓地調査報告書』に翻刻がある。
- (66) (図25)は宇野日出生「京都左京 あゆみとくらし」(京都市左京区役所、地域力推進室、二〇一六年)四五頁による。この林長吉墓碑の存在については宇野日出生氏(京都市歴史資料館主任研究員)にご教示いただいた。
- (67) なお、この「奉先堂」にはかつて林家代々の神主が奉祀されており、『先哲墨寶』(報徳講演会編輯、芸艸社、一九〇八年)一一に『家礼』式の神主と檀の写真が掲載されていてきわめて興味深い。林家の神主は現在伝わっていないようで、この写真はその旧を伝えるものとして貴重である。この神主に關しては復旦大学文史研究院大学院生の張哲氏の教示による。
- (68) 近藤啓吾・金本正孝編『浅見綱斎集』(国書刊行会、一九八九年)五三九頁。
- (69) 徳田武編『鳳岡林先生全集』第四冊(勉誠出版、一九一四年)。
- (70) 注54前掲『国史跡 林氏墓地調査報告書』に、彼らの誌石の写真と墓誌の翻刻が載っている。

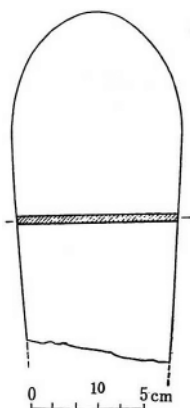


図4 戦国時代の圭(円頭型)



図3 玉圭(円頭型、殷後期)

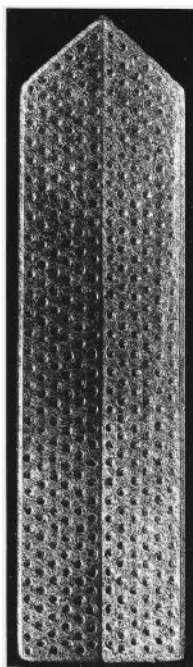


図2 漢代の圭(尖頭型)

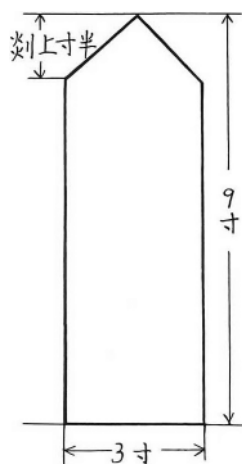


図1 『儀礼』聘礼・記における圭



図7 陳球碑



図6 淳于長碑





图9 柳敏碑b

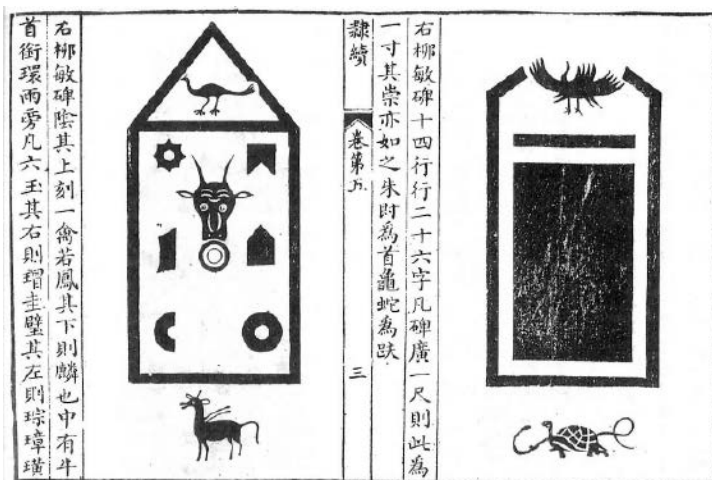


图8 柳敏碑a (右が碑陽、左が碑陰)



图11 孔元措墓碑

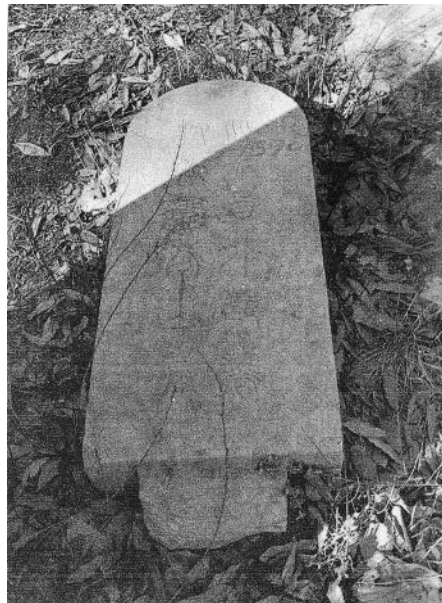


图10 孔宗愿墓碑



図12 朱熹の墓



図14 尹宣挙『家礼源流図』

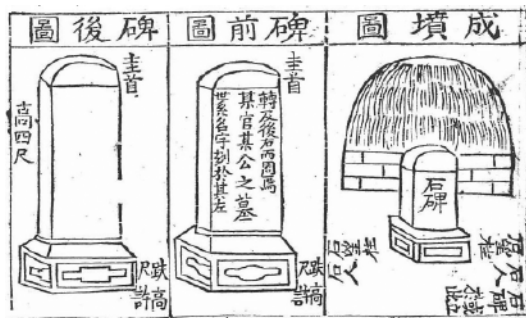


図15 李宜朝『家礼増解』図



図13 金長生『家礼輯覧』図説





図16 李珥の墓



図17 金長生の父の墓



図18 鄭斉斗の墓



図19 金誠一の墓





図21 林永喜墓碑（左） 右は林羅山墓碑



図20 林左門墓碑

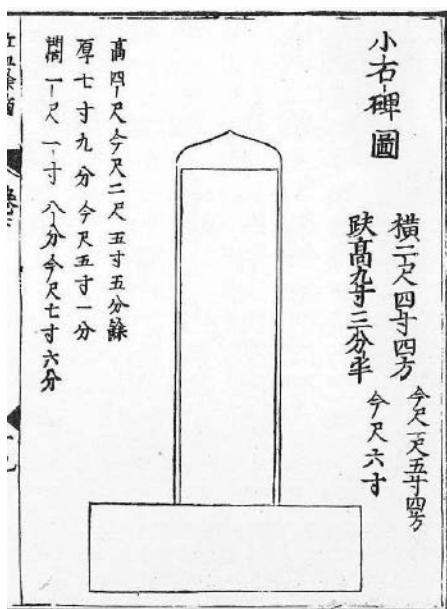


図23 小石碑図（『泣血余滴』巻下）



図22 荒川亀墓碑



図24 林羅山墓碑



図25 林長吉墓碑（左）



図27 林鷺峰墓碑



図26 林読耕斎墓碑



図28 林鳳岡墓碑



## *Jia-li* Style Confucian Tombs in Japan:

### A Study from the Perspective of Cultural

### Interaction in East Asia, Part I

AZUMA Juji

During the Edo period in Japan, many Confucian tombs were constructed, modelled on Zhuxi's *Jia-li* of Nansong China. However, research on this subject has been rather limited. It is against this backdrop that the present study first explores exactly what a *Jia-li* style tomb is by examining tombs of this kind widely constructed in China and Korea. Having thus established a model the study employs field surveys and examines historical materials to ascertain genuine examples of *Jia-li* style tombs existing in Japan. Discussion is limited to the tombs of the “Hayashi-shi Bochi” graveyard. This study also provides insights about the ideological role of Confucianism in Japan.

キーワード：朱熹(Zhuxi)、墓碑(tombstone)、墓誌銘(inscription on the gravestone)、圭首(keishu)、朝鮮儒者(Korean Confucians)、林羅山(HAYASHI Razan)

